圖解

量地指南後編

五

ム1
726
5

早稲田大学図書館

720

量地術前後篇巻之五

測量術

勢南　處士　村井昌弘編述

測量術要

量地術の器械を用て高低深淺を量ること。初中終の三段に分て事を記すなり。亦是ふ隨ふ其初に見盤を用て大小の形と盤面ふ擬し其中に元器を用て大小の形と平面に顯し。其終に準繩を用て無量の形を

本書は量地術の基礎を説く。當時の數学の水準を知る上で貴重な資料。

量地指南後篇卷之五

勢南　處士　村井昌弘編述

渾發術

渾發切要

量地術ハ器械を用て廣狹遠近高低深淺を量ること。初中終の三段ハ。學習すること。亦是ハ隨ふ。其初ハ見盤を用て。一切の形を盤面ハ摸し。其中ハ元器を用て。大小の事業を十字に顯し。其終ハ渾発を携て無量の妙術を一本に盡す。蓋見盤の業ハ此地の種を以て。彼所の形を知る。諸の地勢を摸し取術なり。元器の業ハ當支の順逆を野帳道作ハ記し。分度の矩を以て方角を紀し。圖画に顯す術なり。扨渾発の業ハ。見盤元器の両術を。此一本に畧

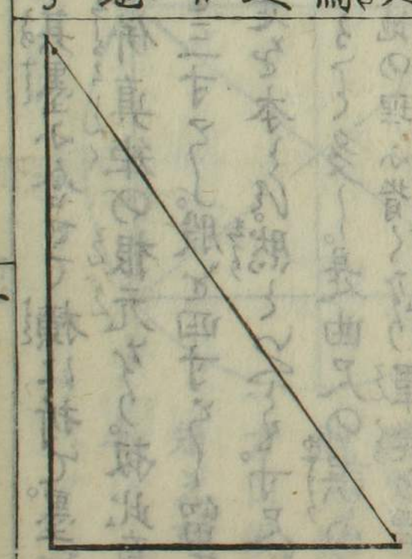
726

して遠近廣狹高下淺深洩す所なく。詳ふ摸す妙術あるを故ふ俗ふ本術ともいふ。其此渾発を用ゆる修練の功要八箇あり。一曰堅体之法。二曰射形の習。三曰頰尺之定法。四曰物見之次第。五曰摸手之定寸。六曰右手頰尺。七曰左手揮発。八曰縱横之習。以上是なり。最其功要と審ふすべし。柳又渾発の妙用たるや。鉤股弦三四五の形ふ法て萬象を立所ふ摸し出すは神器なり。此器元來量地術一用の為り制するふ非ずといへども。諳ふ量地の法ふ叶て微妙なるべし。夫三四五の矩ハ陰陽合和の数ふして量地術の根本なり。方圓曲直より千形萬品此理ふ洩ることなし。因て其自在妙用の一二を左ふ記して學者を曉す。見るべし

筭理渾發

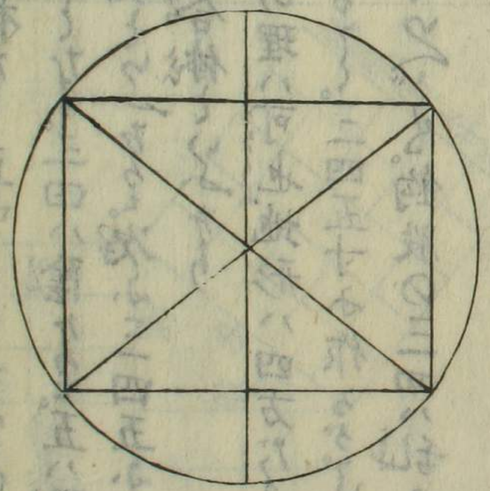
三四五矩

傳云筭理渾発とふ三四五の矩ふ本ける。此ハ器物ふあらず真矩の発見規矩（古傳ふ量地術を規矩術ともいふ）根元也。易傳序云数也易也。其理一ふ。即此理ふ筭法ふ。此矩を鉤股弦といふ凡規矩の術ふ。三四五とふ縱ふして直き物ハ垂縄なり。是を三といひ。鉤といふ。又横ふして直き物ハ水平なり。是を四といひ股といふ。其縱横合して斜直なる物を五といひ。弦也といふ。是を總て真矩といふ。蓋是ハ其理といふ。實ふ真矩尺を寫す器ハ即曲尺是なり。然ともも。其制兼ねて真矩ふ叶曲尺あること希なり。故ふ量地術ふ於て其矩を求め極む



法ハ紙を縦ふ折て墨を引こと。其墨ふ合せて横に折て墨を引けば。乃十字の形となる。是併真矩の根元なり。扨此真矩を得ること。圖のごとく。鈎を三すこと。股を四すこと留て弦を引渡す時ハ五寸なり。是を本とし。然ともこれ寸尺と用ることハ。三四五其寸ふ合ざること多し。是曲尺の誤ある所なり（三四五寸に合さる則ハ天地の理ふ背くなり昌弘曰此言古傳の云処なり姑くこれふ隨て記す）渾発の理ふ寸尺間町ふ拘らば。是を開て寸尺間町に名く。妙用其中ふあり。今渾口を開て鈎と三つ計り。又股と四つ計り而ふて弦を引渡す時ハ。わのごとく。此弦寸彼渾口ふて五つあること毫髪も差なし。故ふ寸尺間町に拘らずして。唯三四五乃矩といふ意味深し。猶口傳云云

平町の始ふ解する所。見込を矩とし。陰ふ用ひ見返を規と



鈎三股四弦五則天地方円規矩之理也

ちて。陽ふ用ひ。即此理也。天文ハ陽ふて円なり。地ハ陰ふて方なり。故ふ股鈎を陰とし。即矩なり。見込なり。弦を陽とし。即規なり。見返なり。故ふ首尾形（古傳ふ見込見返の編口を首尾の形といふ）と規矩合体といふなり

古傳云或問曰鈎股を真矩十字の本なり。陰の理明け。弦ふ於て陽の形なり。此理如何

答曰天圓の中に地方の縦横を取て円径を引渡す時ハ。圖のごとく八段の尾首形を得。或ハ天径一

尺ヨ結る。六寸八寸の縦横なり。正中より十字の径とひれつるとき八各三四五寸となる。三四ハ陰なる。五ハ陽なり。即圓径なり。故ヨ見返を規とふなる。次ヨ三四五ヨ満る理是なり。故ヨ尾首形の規矩合体とふなり

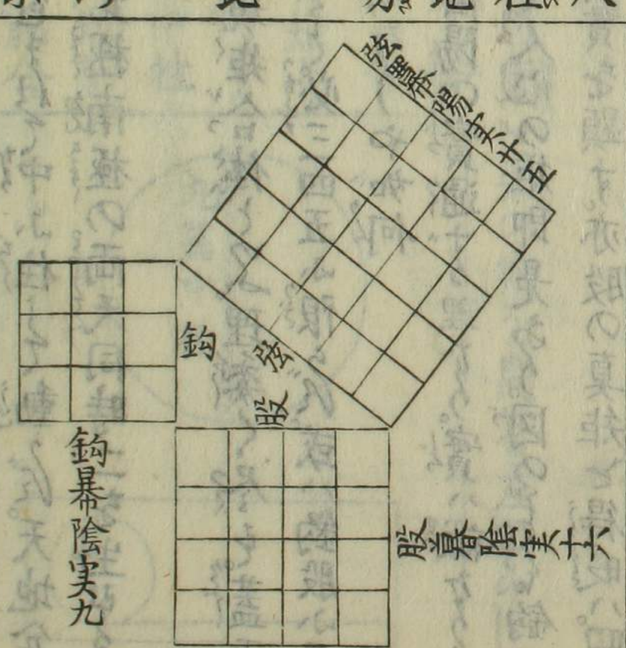
又問曰天径一尺ヨ鈎股の理ハ可也。地形ハ四方なるべし。縦横取て而も六寸八寸ヨ極るこ〻。三四五寸ヨ作るごとし。若四角ヨ取ハ則弦ハ五ヨ叶ふべ〻。鈎股の三四ハ乱るゝこ〻。此理如何

答曰六八ヨ作る物ヨ非す。自ら六八ヨ満るの理なり。語ハ天一を生ずるの理形を以て是をいゝ又十分の一を下すゞ〻然そば上下ヨ一すゞ生じて中を八寸自定る而して其八寸ヨ木を用て満る所の真矩を求そば。横の六寸自

出来す。是天地自然の理なり。然る時ハ各三四五寸を得ありて故ヨ一ヨりして二三四五迄を生数とふ是なり。而して六ヨりて七八九十迄を成数とふ是同じ。右の図ヨ一ヨりして十数迄是ヨり。並ヨ四方ヨりハ八極あり。北極南極の気径ヨりて黄道の径あり。天地合体理即是あり。天文易道の理ヨ同じ猶口傳

問曰上下ヨ一を生ずる此理如何

答曰東南の二州西北乃二州昼夜と分つ世界ヨ



方あるがごとく地ハ陽ふ包まれて中ふ住して動ぐ。天地分つ時ハ世界一同なり。故ふ北極南極の両天同時ニを生ぜるの理なり口傳深しといふ

古傳云問曰。尾首形を規矩合体とふ。理委く尽くと蓋平町の始より尾首を得ざる。必三四五ふ限らず。或ハ鈎股ふ長短あるも。陰陽ふ合す理あるや如何

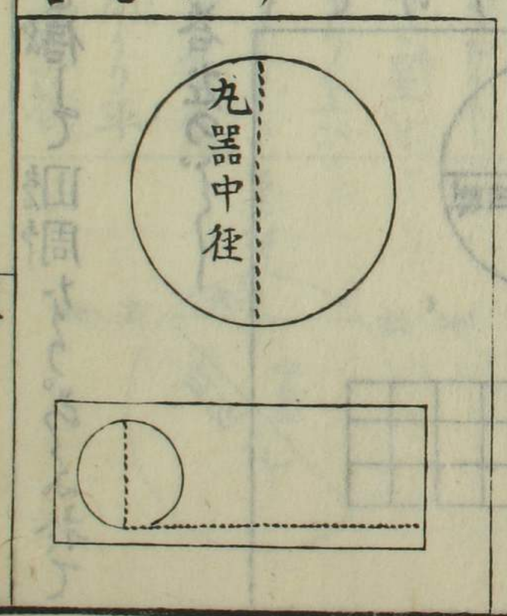
荅曰此理至極なり。即陰陽の実通ずる理なり。実ハ誠なり其実を顕す者ハ真矩なり。人心の矩即是なり。図のごとく。鈎乃真矩を得時ハ三三九の実を顕す。亦股の真矩と得時ハ四四十六の実を顕す。鈎股俱ふ陰の体なり。故ふ鈎羃九ッ股羃十六俱ふ併て二十五を得なり。是則陰実なり亦弦の真矩を得ればハ五五二十五の実を顕す。是則陽実なり。然時ハ陰陽等数を得なり。故に規矩合体する理なり。或ハ鈎股ふ長短あるといへども弦羃の等ふ更に甲乙なし。真矩ふ背ぐるをもて本とするなり猶口傳

圓理　二術

渾発術をもて圓の周を知の術を問答左のごとし

術曰丸器盆盂の類の中径假ふ用ふ

ふ墨を引く。又別ふ板あるも紙あても。図のごとく真矩ふ墨を引。叔下の直なる所ふ置。此墨條の留ふ丸器中径の墨を能合せ而して半周を摶ぐ尽し。中径墨を又能合

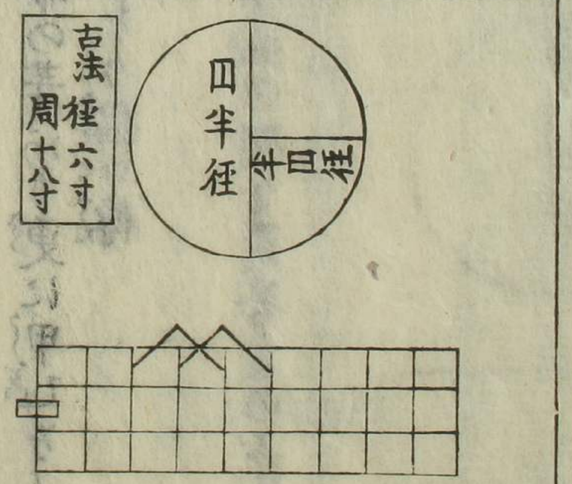


すべて乃大成す。此半周を倍して圓周なり。ちくふ於て

問ふ

圓の歩を知る術を問　答左のごとし

術曰圓の半径ふ図のごとく墨を付け。是を前術のごとくして紙上ふ摶ぐ半圓周て墨をつけて。是則長さなり。又圓の中より半径を横ぎり。是を幅とす。かの墨の長さハ圓の半周也。右摶ぐなる墨なり。扨図を得て歩数を知る□此墨の長さハ中より半径なり。後ふ得る墨なり。茲ふ



おゐて問ふ

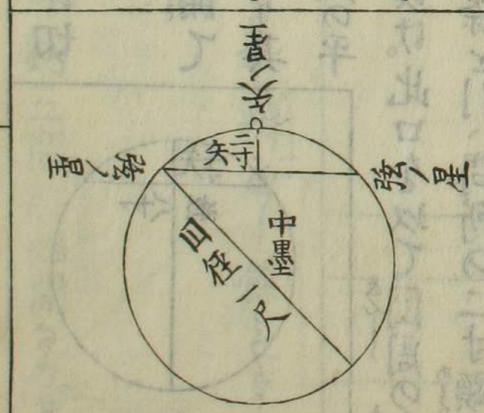
径矢弦　二術

径矢あつて弦のすを問。或ハ径弦あつて矢のすと問。或ハ矢弦あつて径のすを問。三術倶ふ渾発を用ること同意なり

今問平圓の闕矢二寸。弦八寸あり。径幾干　答曰一尺

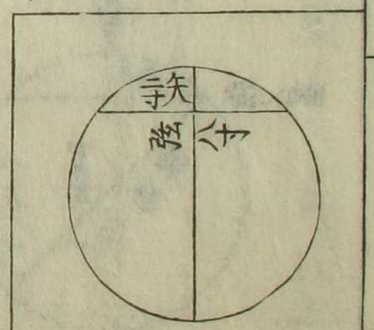
術曰真矩と設て渾発の口一寸なり

真矩の正中より。左右へ四つ計て星を突。苗八寸の弦ぎり。又中墨より上へ二つ計り伐。二寸の矢とす。然ーてまた別ふ渾発を開き。中墨の條と。矢の苗め星と弦の苗の星と。合所より平圓と廻し。實の圓径一尺と得て問ふ答



今問假令ハ田径一尺ふて弦八寸ふ切て矢寸幾干　答曰二寸

術曰真矩（真矩とハ曲尺なり）を誠て渾発を開て一寸とす。此口を以て中條より五口量り其五口を一口ふ合せく。平田を廻せば一尺の平田を得るなり。扨別ふ真矩八寸口を設け。此口を以て田周の合所乃八寸の弦なり。是より真矩ふ矢の條を引ハ問所の二寸顕る

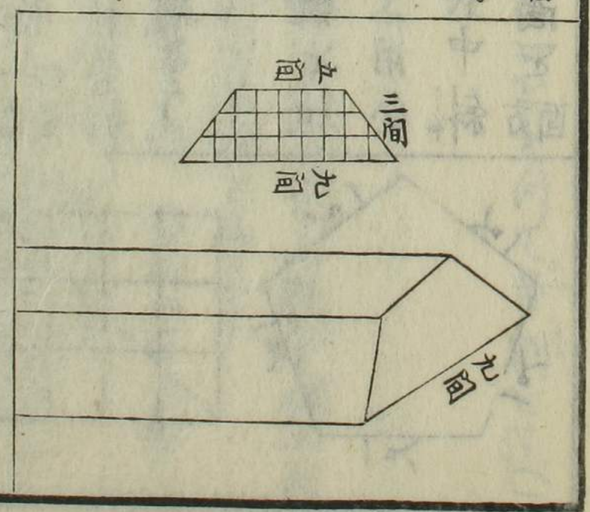


坪詰

坪詰といふハ或ハ錐形楕形或菱形片狹等。土岸石垣堀壕築山等の坪を積ると云。但平歩を詰ると云とハ少く異なれども大小同じ

今問土岸あり馬蹄五間敷九間。高三間長十五間あり。此坪幾干　答曰三百十五坪

術曰渾発と開き。一間の口と定め馬蹄五間敷九間と計りて俱ふ合をれば。十四を得る。此十四ハ折半をれば七となる。此七つを竪ふ。右の高三間を横ふ。坪ふ詰まバ即小口平面乃坪廿一坪あり。是を長く引き延ふとハ廿一間なり。即是を竪ふ立ふりちひ。扨土岸の總長十五間を横ふ量まバ坪数三百十五坪となる也。図を見て辨ぶ。餘をまくこ是ふ準ぶ



歩詰角形　二術

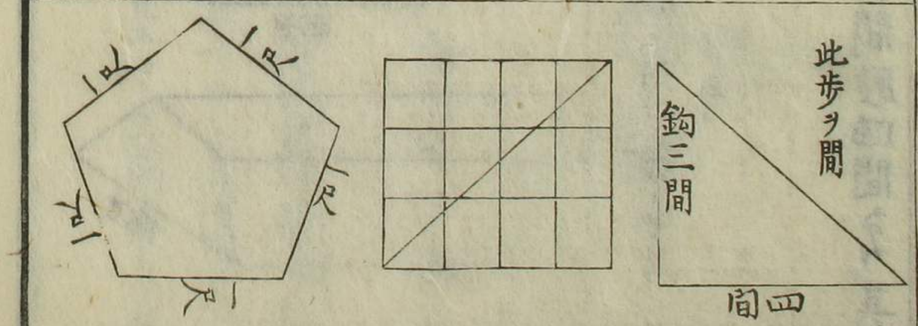
今問曰三角形歩詰（四角縦横の歩詰ハ記ふ及ばず）鈎三間股四間あり。其

歩幾千　答曰積歩六歩也

術曰渾発を開く。間尺（真矩の尺なり但今ふところの一間なり）用て股四間鈎三間計つゝ。縦横小形を極る時ハ。積歩十二歩あり。是を隅より隅へ斜小半減して。歩積六歩を得て問小答（一倍の数を得る故小図のゝゝ半減して歩数を知ふなり）或ハ平錐。山形菱形斤狭等の歩積を知るゝも各同術なり

又問五角形の歩詰如何

術曰或ハ一面一尺づつの五角の歩数を知ゝ。五角の形を極め。其一面を一尺小用ひ十小割て寸の口を定むゝ。扨其中斜方面と得て。是を五つ計て長さ一尺の半あり横さ一て右の十小割る寸の口をとりて。歩割をはじ何程までもかくのごとし

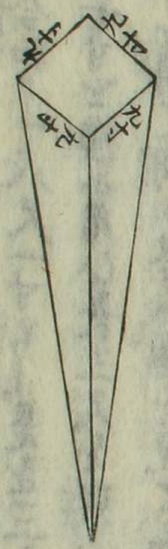


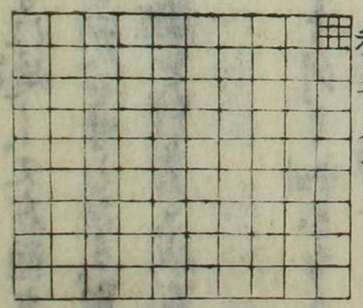
錐形

錐形といふハ或ハ上方ありて下鋭小。或ハ下方ありて上鋭る倶小同理なり。四方錐あり。三角錐あり。楔形あり同術とする一

今方錐あり。四面九寸。長三尺也。其積幾千と問　答曰八百十歩

四面方錐





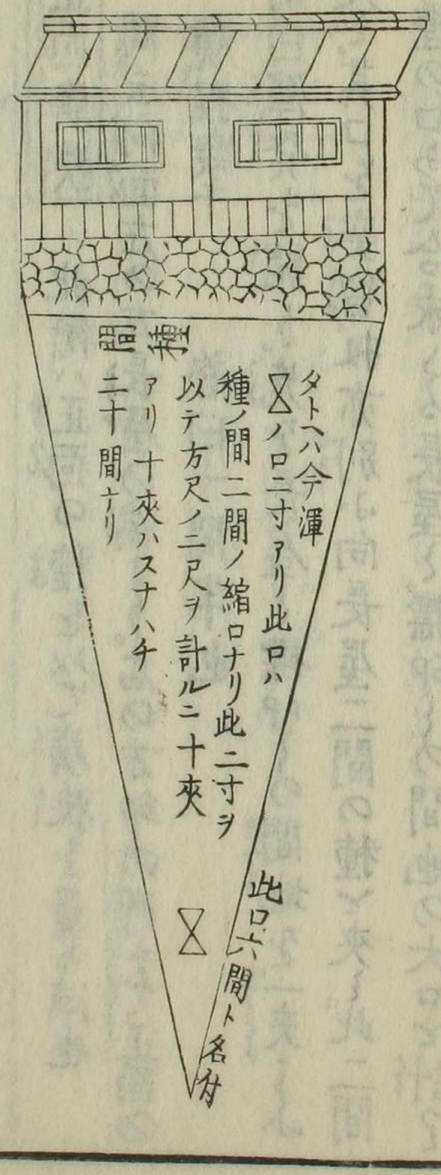
術曰渾発を開き。一寸れ口と定め。是を方面九寸に延し。又方面九寸と合和して八尺一寸を。是を三ふ除すれば二尺七寸となる。即二尺七寸を横ふ用ひ長三尺を竪ふ用ひて。墨線を引くべし八百十歩を得て問ふ答へ。圖を見て知るべし

又三面錐の積を知るべしは。三角の法を以て知るべし尤三ふ除して。前術のごとく。歩積を得て問ふ答へ

平面遠近

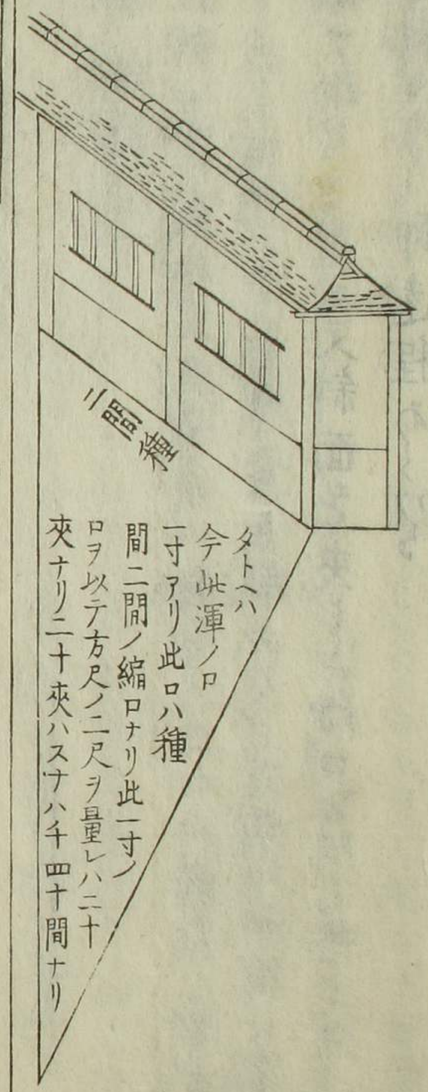
此術ハ向面の種を以て。遠近を量の法なり

術云向の種間二間の左右と。本座より渾発の両鋒まで夾々。其渾口を種間二間とろげこれを以て頰尺二尺と量て遠程を知なり



斜面遠近

此術も亦前術と其事理一致なり。只向の種間二間斜面なるのみ。前小反す。尤渾発を斜ふなして。向の斜面と合如働すなり。是も又斜面を夾々口を以て頰尺の二尺と計るなり。即遠程あるべし

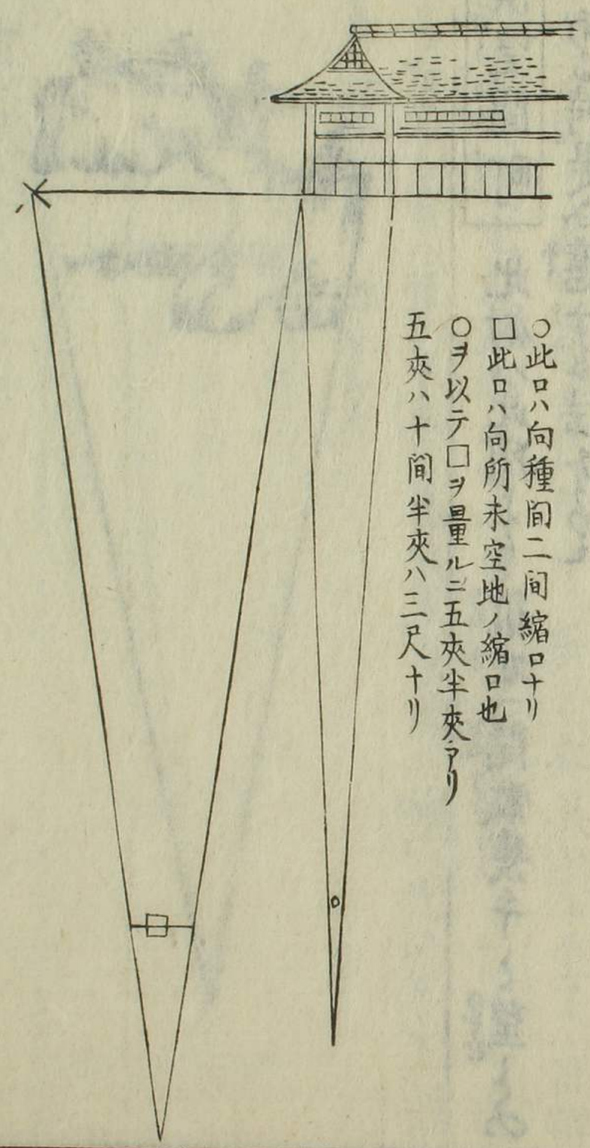


正面廣狹

此術ハ正面の種を以て。廣狹を量る法也

問云向面左の方。長屋の端より。右の方印の所まで正面の廣程幾千　答曰十間半也

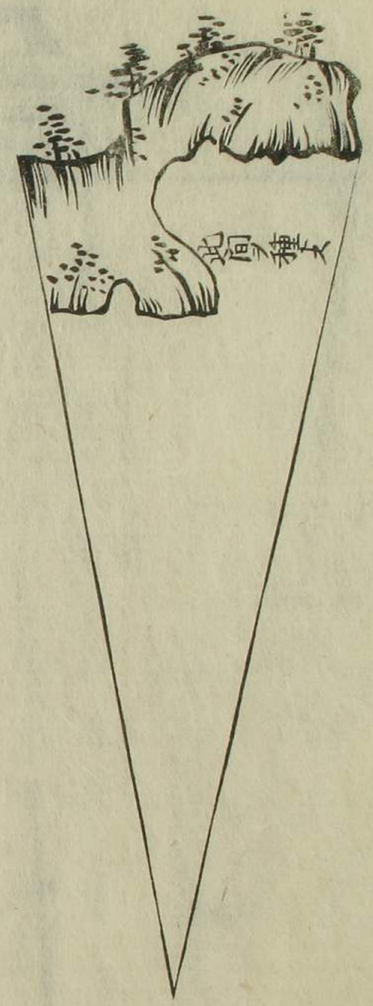
術曰渾癸を開き。先を長屋と標印との間地を。一夾こふ夾こ。其口を突留。扨亦別ふ向長屋二間の種と夾こ。此二間の種の口ゐて合求こる長屋と。標印との間地の大口と計て前面の廣さ幾十間半と知ふなる



斜面廣狹

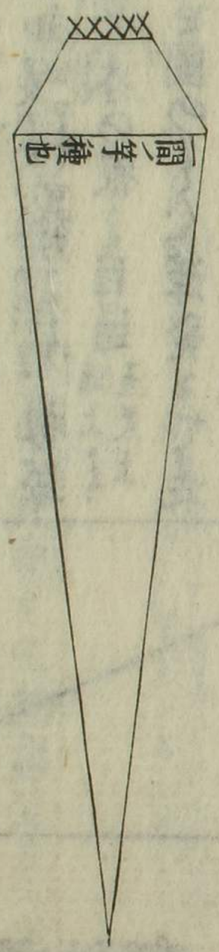
此術も亦上ゑ所謂。正面廣狹の法ふ同じ。因て其巨細を贅

す。其術大成の理ハ前件ふ所謂正面廣狹の術。又斜面遠近の法を照し考ふべし



横望間町　此術ハ此所より彼地へ間数幾千と望ときの術曰渾発を開き間らし。是を以て方尺の横手より望程

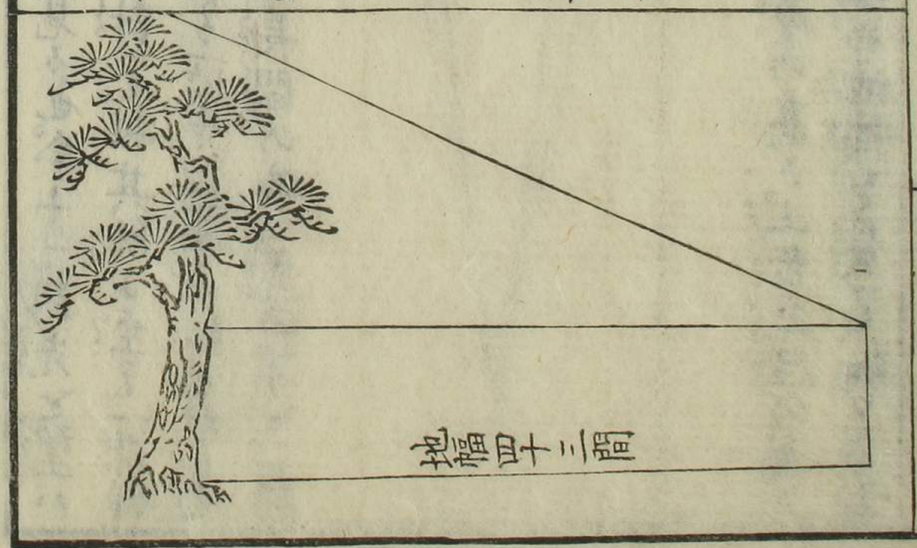
計て其留ふ渾発の鋒をたし込て見る也。今十二間先を望ハ渾発戔開き。其口ゆて方尺を十二計る。扨其所よ至る一間掉を持せ先へ遣す。右渾発の口ふ合る所十二間と知る。尤違うるを見る時ハ竿を立て見也。若長間の時ハ先の竿を二間ゆを三間ゆもすべしなり



知諸高下　此術ハ城楼堂塔の高竹木家屋の高さ。山岳丘徑の高さ總じて高下を求る法なり。尤豫め地幅を量て知るべ

上の術なり。地幅とハ。此所より彼所へいづれにても。其量るべき物の地下までの遠程のこと也

術曰今図する所を先地幅を四十三間と知是ハあらかじめ計りて知るなり叔渾発を開て。本の根と目通地上五尺上ふ當を圖のごとく。渾発すて是と夾こ。其口を紙上ふ突留て。叔方尺ハ地幅なるゆへふ新ふ方尺を四十三間の地幅ふ計りて合せ。その今計合せる渾発の口をもつて右夾こ突留なる大口を計りて其



小居する長を加入し木の總高と知るなり

若此術違さるを試んと欲せば。右の方尺ハ地中四十三間ふ准じたる方尺なるゆへ。則是を地中ふ用も。渾発の口ハ方尺二尺を地中四十三間ふ計合せる。一間の口を用て向の木本へ一間の竿を立させて。是を夾こ見るふ。右渾発の口ふ竿の一間必至て合さること。違なきを知る尺すて地幅を計りたる時ハ尺を立ふなり

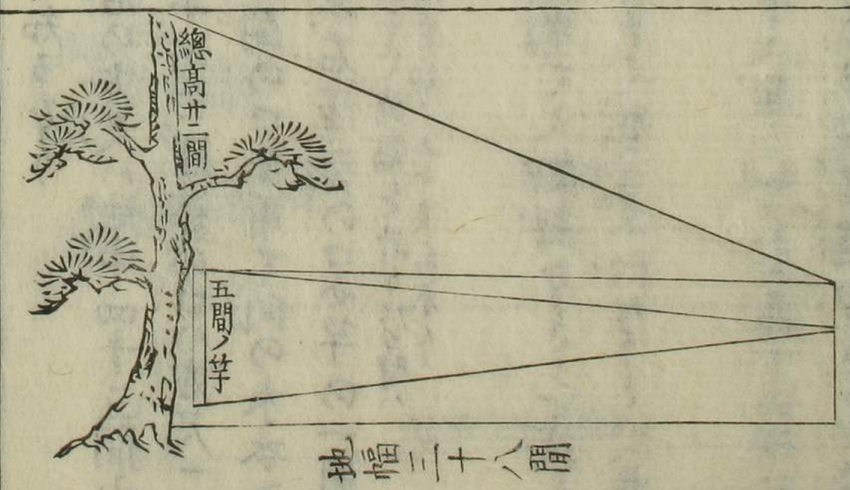
極諸高下

此術ハ兼て量て置たる諸高下殘重て又齟齬なきを試こ見る法なり。其事右ハも粗記したれども。贅言ふ似たりといへ共旧法捨るふ忍ず爰に贅す

今左ふ圖するごとく。兼て地幅を三十八間と知て。又高下の術ふて。木の總高をも廿四間と知るなり。此術若違なきを改

発見ふなり

術曰先木の高を廿四間と知る。扨右の三十八間の地幅小方尺を計合せる渾発の口此口ハ一間の縮口を五つ合せ五つ計合せ。其五の合る口を以て向ひ五間の竿を立させあるを夾み見るふ。其渾発の口向ふ立てる。五間の竿ふ必至と合ふ。ハ。術ふ誤ると なさと知るべし。猶前件を照見すべし一傳ふ云。此術ハ片極を竪ふ用る理なり。或ハ天守矢倉の重々を紀ふ又三分一五分一等を求る所ふ答なり

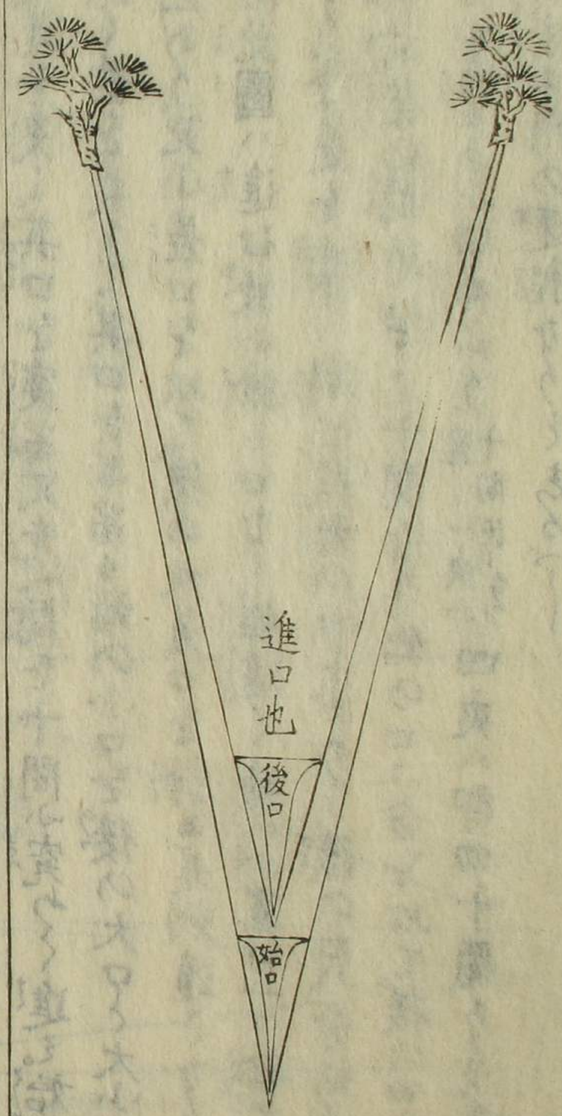


故ふ指高何分ともふなり云云

天口 進で量るを天口と名く陽ハ進むの謂なり

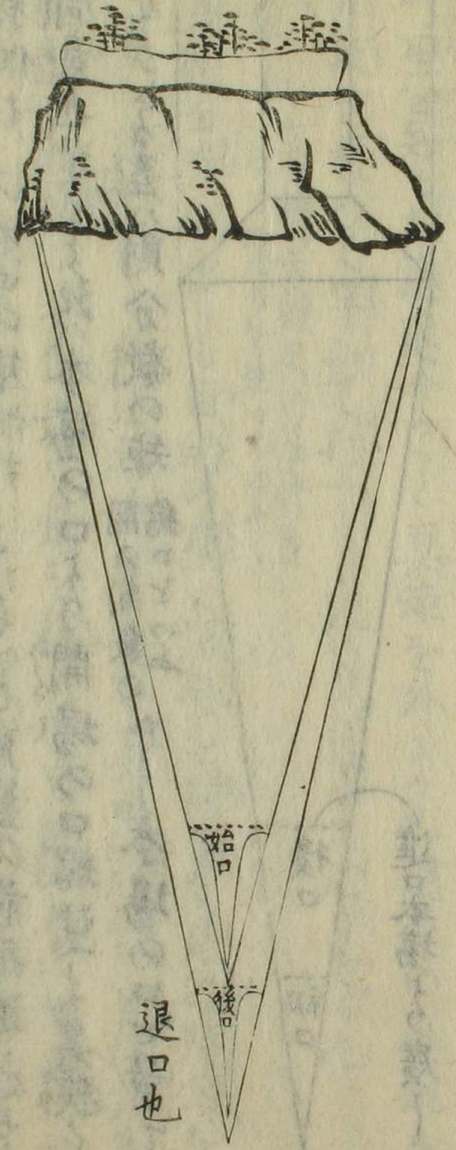
此術ハ進で遠近を知の法なり

今図する所を以て云。向正面左右ふ二株の松あり。渾発を開き て。是を夾み。其口を突留。又先へ間を十間ふ究めて進む。始の如く。長を夾て。其口をも留る。始の小口を後の大口と大小の差あり。此小差口を以て。後の大差口を計る。是則遠さなり 尤此圖ハ進む故ふ捨る口なり。但退く時ハ小差口一つ捨ふなり。今是を委く解せば。始の口二分あり。後の口八分なり 其前後の間進むこと十間なり。始の口二分を以て。後の口八分を量るふ四夾なり。但一夾ハ十間 四夾ハ即四十間なり。是即求る所の遠程なりと云るべし



地口　退て量るを地口と名く陰ハ退くの謂ろ

此術ハ退て遠近を量るに法なり。前術の天口と。其法同き也と意得べし。天口ハ進こ地口ハ退くに違あるに因て差口を用ると捨るとの別あるまでなり。天口地口互ふ考合すべし



天口　或傳云渾発の差口を量るを天口とふ

傳曰本場より進退の分数間のハ見盤ふ倍して。六十分一と用ひ。九四十分の一なる時ハ差なし

術曰先目的まで。空眼を以て。何十何町と考へ。扱鏍り渾発戔指て。目的の山ゆても。峯ゆても。木ゆても。或ハ村里の境ち

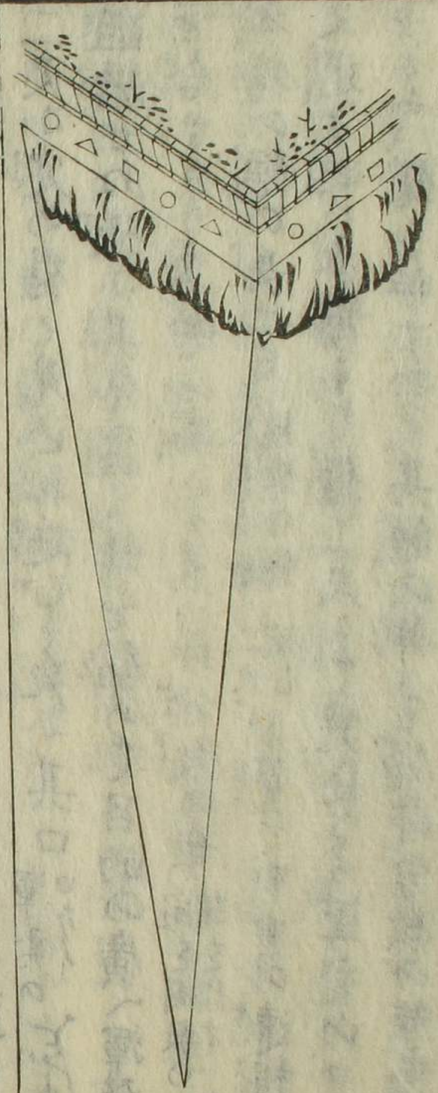
境までなりゐる。幅のあるゝの体渾発の口ふ合せて見込せ。假令
ば其口五分なゝば。五分と紙ふ突留め四十分一の分数を進
て。又見込ゝれハ。假令バ五分三厘ある。寅前突留ゝる口ふら
ゐて。其廣分三厘なり即進所の分数開の間数の矩と知るゝ。其
三厘の差口を以て本場の口五分を量て。町里をハ求む。三
格渾発と作すの物。四の矩方尺と作すよなること見盤の前後進退と
同意也。退くゝれハ本場の口ふら開場の口縮むべゝ。其狹く
なりゐる差ハ則分数の矩開の間数の縮口をふなり。本場の口と量て

町里と知る。尤進退すること真矩を外ゐる也進退の真矩を
分数を極めて竿ゐて打するゝれハ見通して心ゐる也

地口 或傳云頻尺の屈伸を以て量るを地口といふ

其術云先何ゐても目的の廣を渾発を開て見込時鏡を
二尺ふ定め得と見込扨進むゝれふ其口渾発のとば少も
齟齬せぬ様ふ其侭置て鏡を縮めて目的の廣へ渾発の口
と合すゐる。其鏡の縮ゐる差ハ即分数の矩開を間数の縮を作すを以て
本場の鏡の長二尺本場の鏡ハ二尺開場の鏡ハ縮むを量て町里の遠程を知る
又退く時ハ本場すて鏡二尺すて見込ゐる渾発の口ゝ合
するふハ。鏡を伸すかる。其鏡の伸ゐる分。即分数の矩也。此伸
ゐる差の寸分を以て。本の二尺を量て町里遠程を知る。是も
向の鏡の差を以て量る故ふ地口と云。差の用ゆ天口と違

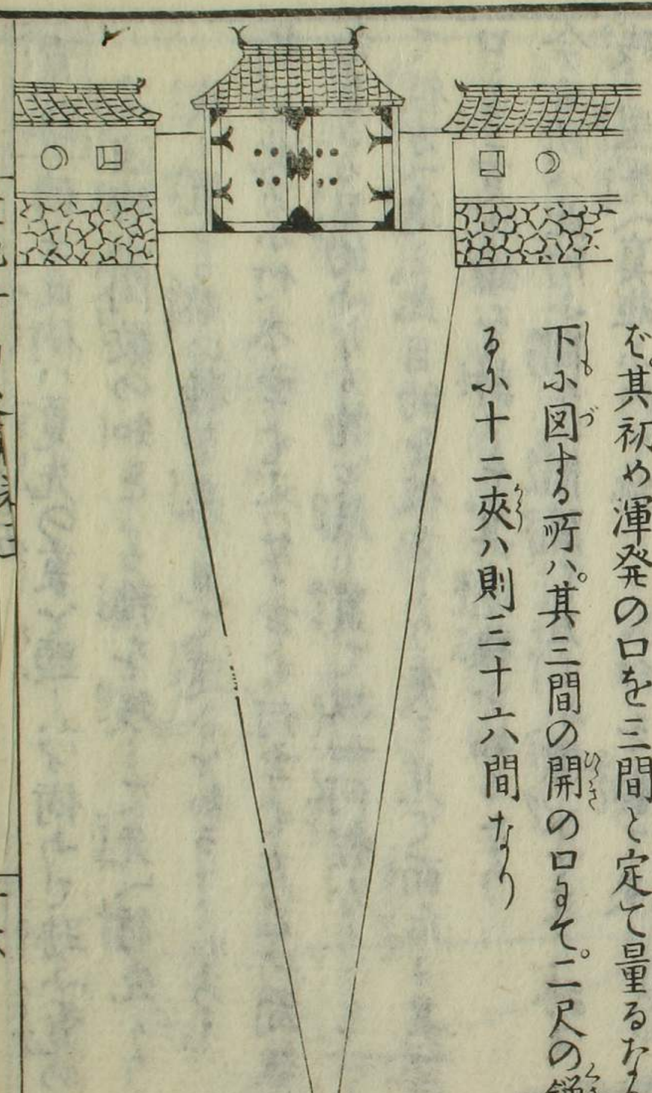
こゝハ四の矩の天口ハ三拾ゆて三つ量て地口ハ四の差ゆて四を量る故なり。三四五の理を以て真矩ハ進退するこを考べし



覓先

傳云此術を覓先とゝハ。先ハ覓るの謂也。此より彼遠程を計るハ。此方ゆ間数の知る種なき故ハ。目的の方の目ゆる物を假の種ハ用ひ術を勤めて後彼所ハ至て。彼假の種の間数を直ゆ計見て。實の遠程を知也国図等の節ハ此術多くあること

術云先此方ゆて向の假目的を夾て。其渾発の口と其俗ハ置叔向望の場ハ行て彼假の種を鶩直ハ量てこるハ。種幅三間あるで。其初め渾発の口を三間と定て量るなり。故ゆ下ハ図する所ハ。其三間の開の口ゆて。二尺の鏁を量るハ十二夾ハ則三十六間なり



覔跡 傳云此術ハ覔先の裏を顯したる術ゆえ跡ふ覔の謂也

其法跡ふ間数の知れたる種を残して先へ行先より〳〵

残し置たる跡の種を夾て見て遠さを知るなり

術曰此方ふ竹木なれも又ハ竿なれも何なれも左右の間数慥ら

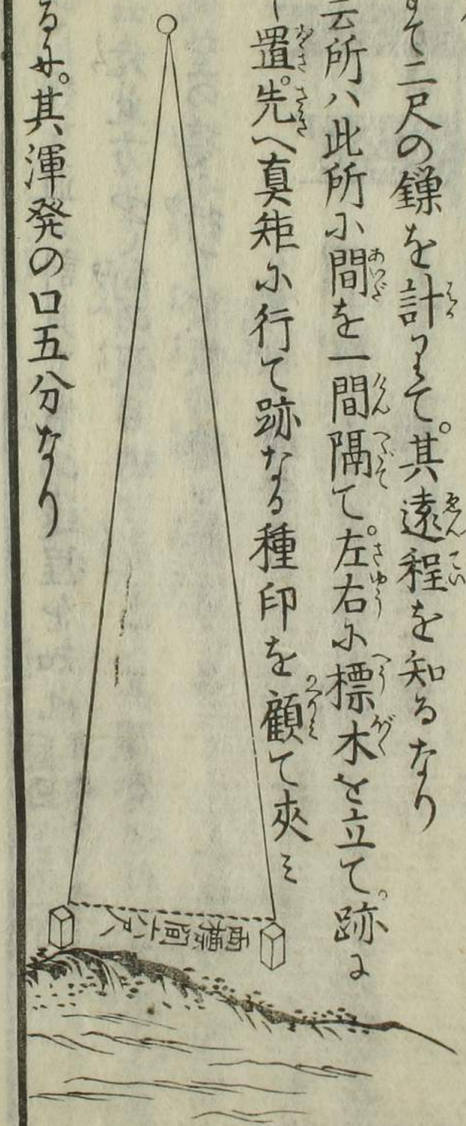
知れたる目的ふなる物を残し置て扨如何程なりとも心ふ任せ

て彼方へ進こ此目的を彼方より夾て見て而后ふ其渾発の

口ふて二尺の鏡を計りて其遠程を知るなり

今云所ハ此所ふ間を一間隔て左右ふ標木を立て跡ふ

残し置先へ真矩ふ行て跡なる種印を顧て夾を



見るなり其渾発の口五分なり

此渾発の口五分ハ此口を以て二尺の方尺

種一間の縮口なり

と量る時ハ四十五夾なり四十五夾ハ即四

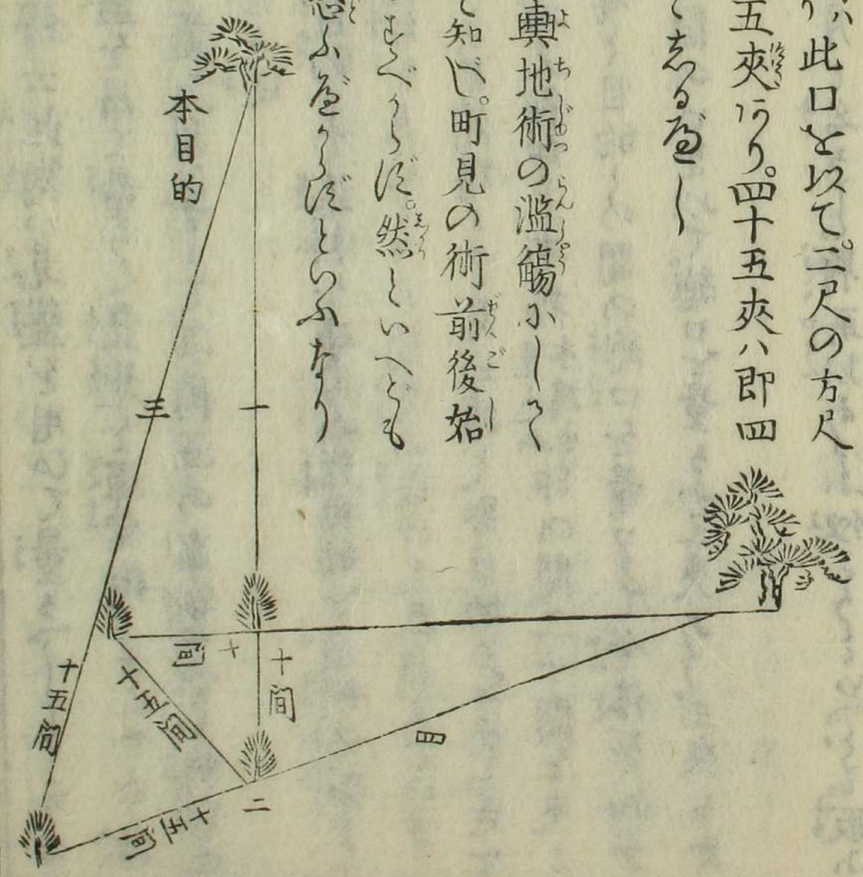
十五間なりとなる也〳〵

草結 旧傳云此術ハ輿地術の濫觴ふして

又能旧格の本と知べし町見の術前後始

終此理を外ふなくして然しいへども

實測なるを惑ふ是なるべしとふなり

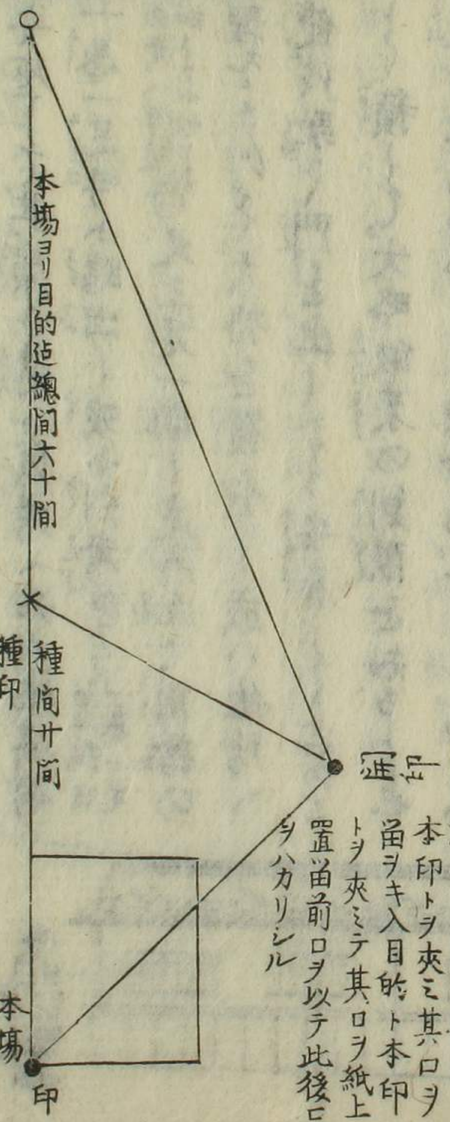


水月

古傳云此術ハ見盤を用ひて量る〳〵〳〵云々
昌弘曰見盤を用て量らく豈是を渾発術と云んや今按
ずるに全く見盤を用ひずして其術渾の事業ふ〳〵明白也
〳〵〳〵左ヨ述

術曰今正面の目的まで遠程を量るに先目的を通例のごと
見込叚新ふ種印を見込より廿間先ふ設けて然後又右の方へ
横斜ふ進ミ開ミ其開場ヨリ見込場と即目的とを夾ミ是を
紙上ふ突留置叚又種印と本場見込の本場也印の間二十間を夾ミ
此ロを以て本場と目的との間の總ロを量りて全体を知る
今此種の間廿間のロを以て總ロを量るに三夾あり三夾々即
六十間なり
或已此術を水月と名ること聊所以あるに似たりと雖ども取ふ

足らざる説なり古傳ハ嗚呼〳〵多〳〵笑ふべし

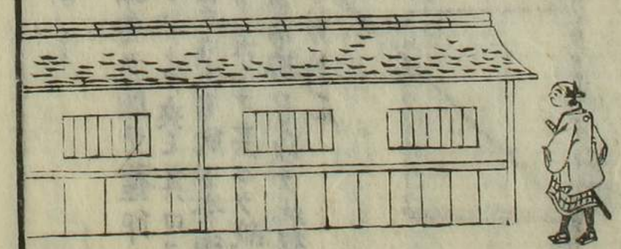


樣脚

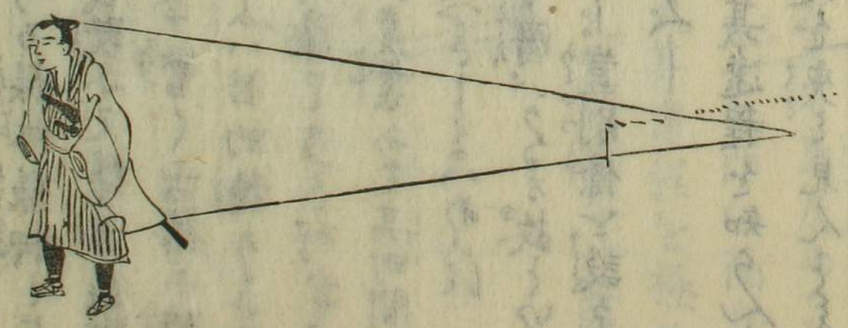
此術ハ向面の物陰を人の通行すると見て其歩数と試ミ向
面の廣さ幾于と知の術なり古傳ハいふ処なり
術曰古傳ハ云常ハ歩数を呼吸ふ合せて試ミ置て知るなり

大体一呼吸の間ハ遅さハ二三歩。速さハ三四歩也。其中を考へ量りて。是を以て糺し試るべし。其廣程を知る也と云

又吉法式傳云。森林の陰。土手の陰。長屋の陰。凡物陰を通る人を陰へ入さる前ハ遠所より望見て陰を通るをすぐる間安座して其廣さ遠さ共考へ知る也。其術一息一足呼ハ蹈出し吸ハ引考なり　昌弘曰一息一足の考へ呼吸を知さるハ似たり　又三足一間と定め凡て用捨の理をわきまへ。大格を積るべし。或ハ他所へ使ハ馳る門を出しより安座して右のごとく積して。大略飯來の刻限を知る也是吉傳のつゞまりの今のごとくなるべし



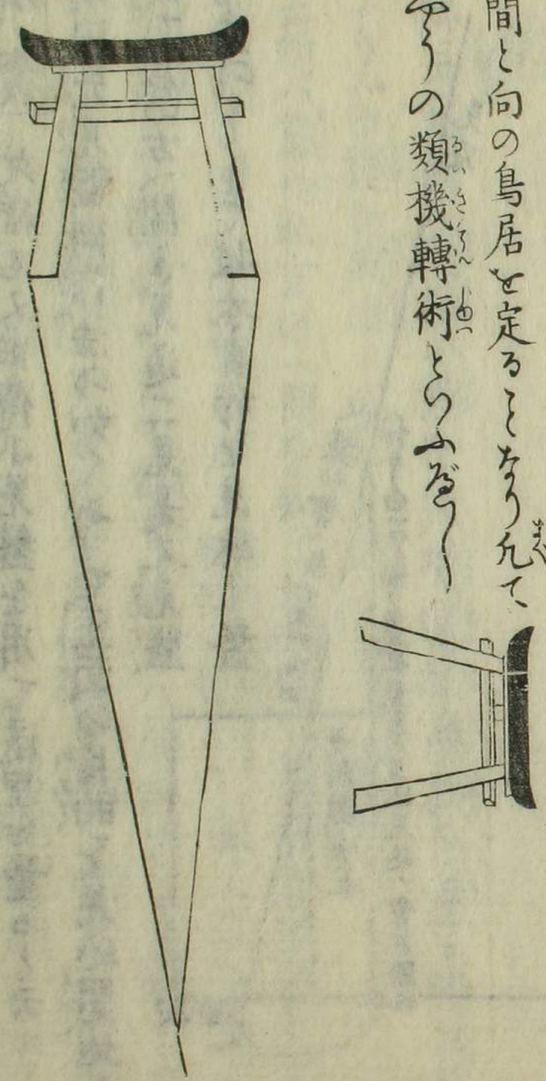
様体　此術ハ彼方ハ立る人を種とし此方より其所までの遠さを知る術なり術曰渾発を開き向ハ立る人を夾を見て。譬ば其渾発の口二分あらばハ十三間二尺。三分ならば五十五間三尺。四分ならば四十一間四尺也。餘ハ是に倣知べし。右何も鐔二尺を人長五尺へ乗じ。即渾発の顕る口を以て除き。扨又一間の法六尺を以て除けば。遠程何程と知るなり凡人長を五尺とすれども大畧なり。殊り急なる場にての業ハ用捨の格を用ひさるべし



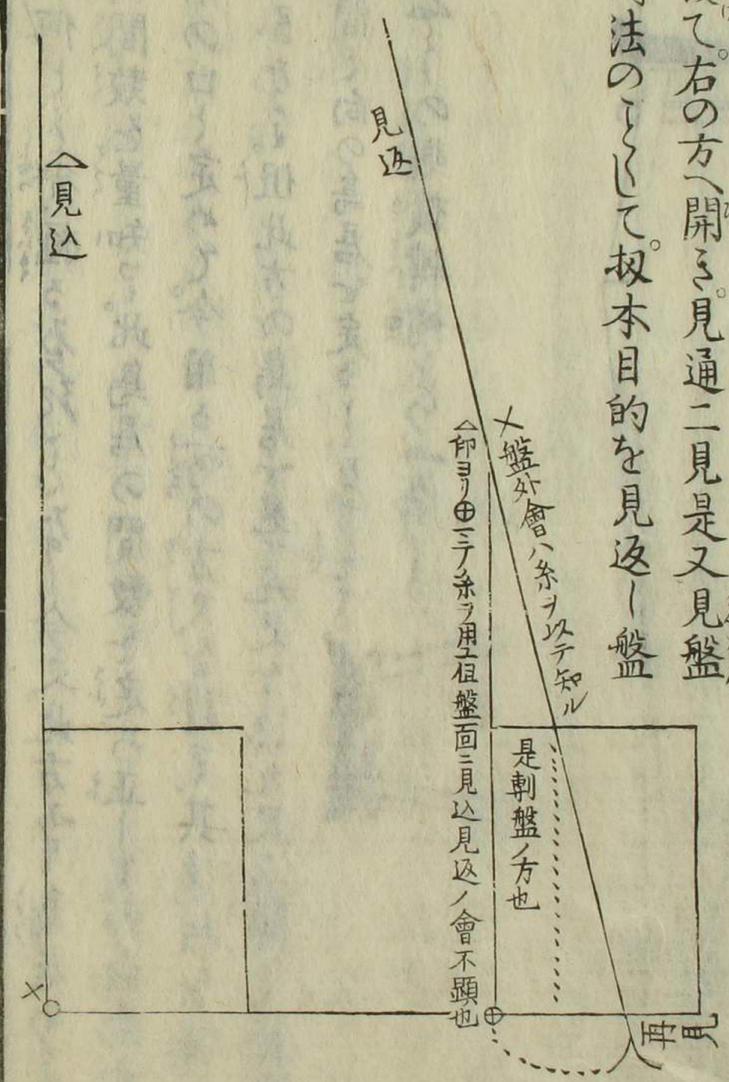
又旧傳ふ様程といふ名目あり。其術を考る様体様脚と兵
支一般なり。根其名目を立たりと見ゆ。既ふ又様体様脚
別術ふ非ず。是も一術となりて然らんも今暫く古傳ふ隨
て此みを是を述ぶ。昌弘曰。様体様脚といふハ目的種なるさの
地と又ハ山陰土手陰。叢中との諸の術障を多き所ハて
人の歩行の跡の数を以て種々一本ハ支業ハて其町間を
量を知るをもてもいとべきを。好で試ふ用ゆべきをハあるべ

白浪　白浪術といふハ旧傳ふなづけなる所ハ故といふ
ものを知らぬ。昌弘考るふ。寛先術と同じ。豈別條を設ふ
及へんや。是又好事の説なりと察すべ
術曰今圖するところの彼方の鳥居まで其遠程を知らんと
欲ふ。向の鳥居其間数を知を。故ふ是を夾を見んとを

如何とを術極るなることなり。今又此方ハも鳥居あるを
其間数を量知を。此鳥居の間数を定め正して。即向面鳥
居の口と定めて。今用る所の方尺を計を。其遠程を極め
知ふなを。但此方の鳥居を見て九尺なるバ九尺二間なるバ其間
二間と向の鳥居を定るとなり。凡て
如何の類機轉術とふなり。



猥獲　此術も又旧傳ふ見盤を用て遠里を量ると云術曰先見盤術作法の如くふて正面の目的を見込開地を設て右の方へ開き見通二見是又見盤術法のごとして扨本目的を見返し盤



面ゟ墨線の會出來ざるゟ因て糸を引て盤外ゟ會を制し是を量るとふ委くハ図を見るべし

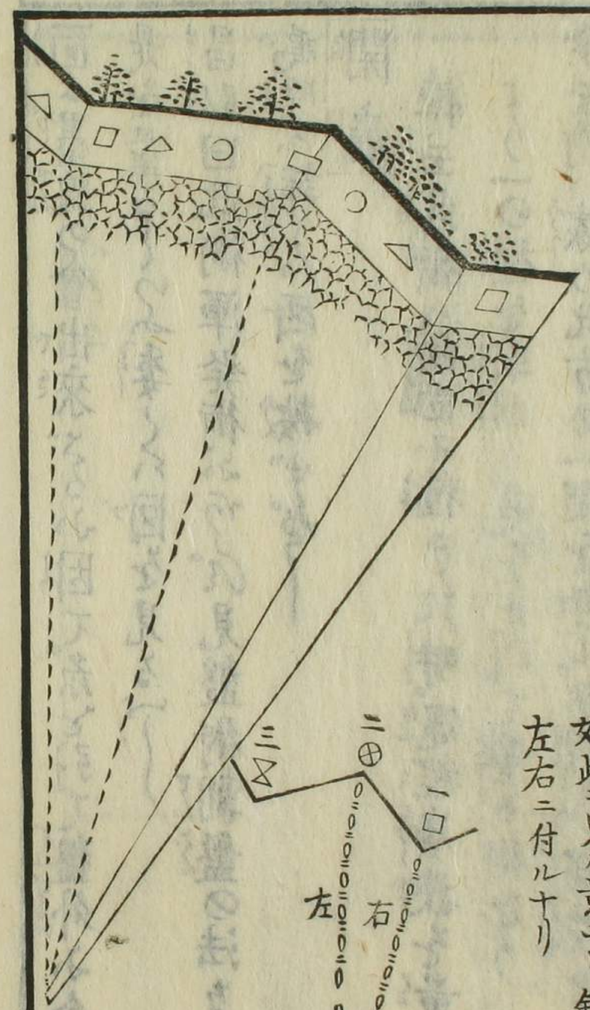
昌弘曰此術渾発術ゟ行ひて見盤術剌盤の法なり。例乃嗚呼ろ。詳ハ図を按ずべし

開扇

傳云此術ハ向面ゟ種なれ時遠程廣狭を量る時に外より一の種を取出し是をもて量る術なり

今云所ハ豫め此方の一間を知る。扨是より當術ハ渾発をもて此一間を夾ミ遠さ幾量を知る遠程八間なり取出す種なり扨又二へうつるハ分間して一の塲の左の鏍を遠さ八間計るゝ鏍を右に付け二の塲を鉤ゟ見る。尤分間の口を残し置此分間の口ゟて今見る二の塲の左の鏍を計る。幾間幾尺と知る

扨ハ三の場へ入る。又三の目的を見るも。二の場の術と同意なり。場所何程ありとも。是すべて倣ふべし。此術ハ鎌を渾発の左右に付るなり



如此ニ見ル意ナリ鎌ヲハ渾発ノ左右ニ付ルナリ

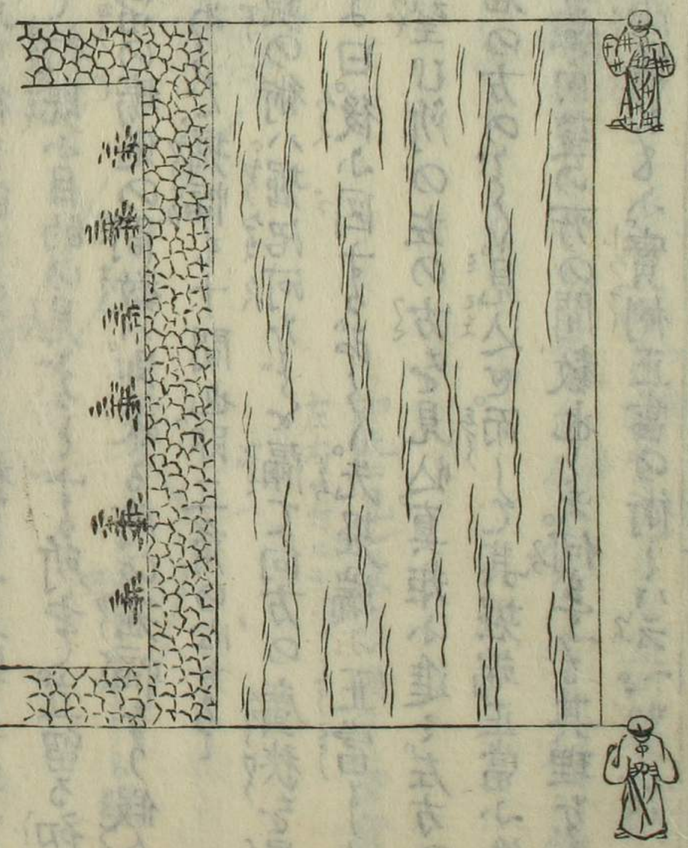
方鏡

古傳云是ハ堀幅川幅等ハ知るの術なり

術曰先堀端ふ臨ミ。向の屏ハそ。石垣ふても目ざる所を撰んで目的ス。左眼を以て彼目的を図のごとく横目ふ見込。真矩ふ進なんぐ。尾目ふ掛て行。既ふ目的の見ぐるとする所ハそ。立留る初の見込の場ハ立留の場迄の間数ハ。即求る所の堀幅なり。假令ば進む間十間あるだ。堀幅も十間也。即二角の心なり

一説ニ曰此方鏡の術ハ。堀沼河なんを隔て向方の廣狭を量る術なり。其法ニ曰。後ふ図するごとく。先堀端ふ正當ス立て。左眼を以て望む所の左の方を見込。真矩ふ進ミ。左方の望の所ハそ。又右の方のごとく見込せ。而して其堀端正當ふ進くる歩数の間。即堀向望の所の間数也と云。何ゆふも其理なきにあらず。然ども両様ともふ。實側正當の術とハ云べからず

量地指南後篇巻之五終



跋

享保の季年。量地指南前編二巻を選集して。世上に擴む。繼て後編を述作いたしたるを。諸侯子乃需止叟なく。既に許諾の志ありといへども。公務餘力なく。心の外に黙止す。其後不圖病痾に羅て苦惱程久し。卒に痼疾となりて藥劑無驗。起臥不遂。因て不得止致仕閑居すること。茲に十有餘年なり。予成童の昔より。武學兵術に癖して

主用繁務の中とつゝも此道のゝ一日も不棄し其後病ふ沈もゝ講習を廢せゝ既ふ右ふ云るゝ況や其他の事藝量地の小技をふ誠ふ其術忘ふるに似たり然るふ此頃奥州乃山岸定則予ら閑隱の扉を叩ゝ量地前編の余意を索るゝ頻なり予再三病を以て辞もゝ不肯強て請ふ不止其深切他ふ超ゝ其勉強人ふ勝もり其為人此道ふ俊發なるゝ世ふ又類少し依て不顧前後點首

もゝ直ふ愚息昌言ふ命しゝ予ら弱冠ふ閲見するゝ所の彼是の書五六部ふ内前編ふ洩たるふ物を拔萃なゝ山岸氏ふ授て暫く其責を塞ゝ元來此書予ら全ふ編述ふ諸本の訓詁補ゝ拔萃なゝ者なれ然もゝ的當ふ深理ふ入ゝ者なれ予ら譽ふ行ゝもゝ又猥雜の齟齬ふて終ふ世ふ謗らゝも予ら恥辱もを忘れ

覽者ゝ是をおもへ

寶曆四甲戌夏六月　村井蘓道子昌弘書

平安書林　橘枝堂藏板目録

京二條通富小路西五丁目　野田藤八

古語拾遺言餘抄　五冊　用藥須知　同　三冊　絵本長船川　五冊
神武卷集解　二冊　同後編　同　四冊　同世系略　二冊
本朝續紹運録　一冊　同續編　同　三冊　同世系略　二冊
並王廟陵記　二冊　廣參品　同小本　一冊　百人一首　一冊
同增補　二冊　怡顔齊介品　同　二冊　女子要油漬　一冊
諸家大系圖　十冊　食療正要　同　四冊　神代世系袋　一冊
本朝紹運録　一冊　笑話出思録　藤野東爾著　一冊　市井雜談集　三冊
正續疑孟　司馬溫公　一冊　陶淵明全集　昭明太子撰　四冊　難を救難　一冊

爲學正論 長門[illegible]集 二冊
古訓輯要 同 三冊
名義集覽 同 四冊
量地指南 村井昌弘著 町見秘書 三冊
京繪圖 懐中一枚摺 一冊
同道法附 彩色 一冊
同增補新板 [illegible] 一冊
秋風録 徂徠[illegible]書翰 [illegible]東[illegible]著 二冊
万病回春發揮 四冊

訓幼字義 東涯先生著 八冊
孝經頭書 新板 一冊
語録字義 一冊
菅家文草 十二冊
和歌貝合小鏡 小本 一冊
同名[illegible]小鏡 小本 一冊
同[illegible]集 [illegible] 二冊
同竹園抄 [illegible] 一冊
夏[illegible]文庫 [illegible] 八冊

万世用文章 [illegible] 一冊
滕王閣 歐陽詢石刻 一冊
雲麾將軍 李北海石刻 一冊
海燕帖 董其昌石刻 一冊
勸善櫻姫傳 五冊
[illegible]人氣質 [illegible] 八冊
日用食性 [illegible] 一冊
[illegible] 小本 一冊
[illegible]

四書 正佐點 十冊
古文後集 同 四冊
梅花堂中指南 五冊
同 新版 五冊
古易一家言 新井白蛾著 小刻一冊
同 補 同 一冊
易術便蒙 片岡如圭著 小刻一冊
易 話 同 一冊
筆道如意珠 一冊

二言莽集 今川了俊著 七冊
[illegible]齋[illegible]書全集 五冊
同初學指南抄 二冊
伊勢拾穗抄 二冊
年中行事歌合 二冊
裝束指掌圖 枚摺
[illegible]川[illegible]書合 三冊
連歌雨夜の記 宗長著 小本一冊
職人歌合 三冊

興慶妹背山 [illegible] 五冊
風流茶人氣質 同 五冊
向不見園[illegible] 同 五冊
風流[illegible]進[illegible] 同 五冊
[illegible]人戲言日記 同 五冊
江戸紫[illegible] 同 五冊
[illegible]口駒さらへ 同 五冊
鎌倉[illegible] 同 五冊
一目千軒 新板 一冊

三因方 陳玄無著 十二冊
寺澤四季注来 一冊
同 如安手本 一冊

新語園 了意著 十冊
同 初學注来 一冊
同 不求人 一冊

量地指南增補 附錄 三冊
鶴皐遺稿 者品 小森玄悟著 三冊
同 新書學 一冊

同後編 近刊 五冊
尺牘集要 四冊
世説雜畧 四冊

四書 道春點 十冊
千金方藥註 松岳定菴著 四冊
本艸正譌 居山著 六冊

菅家萬葉集 二冊
本艸正正譌 一冊
同 刊誤 付 一冊

元亨釋書和解 惠空著 廿三冊
古易斷時言 新井白蛾著 四冊
茶道全書 五冊

病名彙解 六冊
周易一生記 五冊
茶雪月集 三冊

十四經和語抄 貝本 范子 五冊
易術手引艸 小刻 冊
東山反香合 二冊